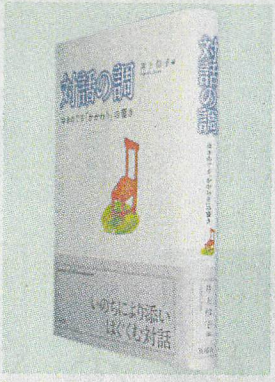
対話の調 ゆきめぐる「かかわり」の響き

井上 信子 編



新曜社　3024円
☎03・3264・4973

師弟教育の「普遍」示す

本書は、「対話の技」「対話の世界」に続く対話シリーズ3冊目、「守破離」の「離」の時代の軌跡を描いたもの。精神科医・神田橋條治氏の元に通い、同氏を師とした井上さんが、師から離れて自らの世界を創る本である。

第1章には「守」以前のイニシャルケースを置き、臨床実践における自分らしさに注目。第2章から第8章には、「わたしのいまの世界」、資質や才能があふれているのに、何かの事情で「資質の開花」がふたをされている学生たちの自己実現を、「教育と心理臨床の綯交ぜになったかかわり」によって支援する営みを描く。そして終章には、18年間の師との対話の一部をつづり、「旅立った」弟子への師による育みを見詰めながら、師弟教育における「普遍なるもの」を浮き彫りにする。最後に、もう一人の師・梶田叡一氏がコメントを寄せている。

師弟対話の中で、十数年前に富士山に積もった雪が解け、伏流水となって滾々と湧き出る三島の湧水が例えとして話されている。

筆者は先年、伊豆・三嶋大社に詣でる途次、「すむ水の清きをうつす我が心」と刻まれた句碑に出合った。連歌師・宗祇がこの地で、東常縁から古今伝授された時に詠んだ句である。日本人は、水に清らかさと永遠性をみてきた。清き泉や井は、命の源泉として深い信仰の対象だった。本書を読みながら、清水と「守破離」の循環と永遠性を重ね合わせた。（矩）